

「私の信仰の継承」

佐伯 博子

私は大正 10 年の生れですから現在 84 才です。

私の信仰を振り返って見ますと、幼い頃、母が寝かしつけてくれる時の一言のお祈りに始まり、やがて一年生になって朝、家を出る時の一言の祈りと生活の中での全てその折々に祈ってくれたことにより、いつも神様は共にいてくださる、大丈夫だとの思いの中に育ってきたものと思っています。

母の祈りは、私が結婚して家を出る時が最後でした。

私の家は、安政生れの母方の祖母が西条に住まっておりました。

当時の西条には、祖母が親しんできたロシア正教の聖ハリスト教会がありました。

明治 22 年生まれ之母は、義務教育を終えると兄と共に故郷を離れ、兄は東京へ、母は京都正教女学校に学びました。

結婚後の母は、私が生れると母の祖父母の元、新居浜に父・姉 3 人と共に計 6 人で帰ってきました。

当時の新居浜にはまだ教会がなく、住友に勤務する方々による教友会があり、民家を借りて集会所として、時々組合教会の牧師が見えておりましたので、祖母はその集りに加わっていました。

その中心人物であった矢内原(忠雄)さん・黒崎(幸吉)さんの二人は会社との間に問題が起こり新居浜を去られました。

その後、住友関係の方々の子供たちのために、民家で幼稚園を始めたのが泉幼稚園の始まりです。

その後、住友より磯浦に用地が提供され、幼稚園と教友会の集会所となりましたが、昭和 20 年 7 月の米軍による空襲を受けすっかり無くなってしまいました。

さて、これは私が物心のついた頃のことですから、大正の終わりに昭和の始めのことですが、母は一人で我が家で日曜学校を開き、近所の子供たちが集ってきていました。

昭和の始めにホーリネスの牧師が来られ町の方に民家を借りて住んでおりましたので、週一回、私の家で夜の伝道集会を持っていました。

いつも私が案内に行かされ、解っても解らなくても坐らされていましたが、大抵は眠り込んでいたようです。

これは、私が女学校 2・3 年になる頃までですから、10 年近く続いていたと思いますが、その間病人があつたり、母が倒れたりして休んだ時もありま

真鍋頼一は祖母の兄

した。

この間、昭和の初めの頃にはカトリック教会ができ、宣教師の方とシスターが母を訪ねてこられ、当時としては珍しい姿に皆が驚いていたことを覚えています。

母に連れられて初めてカトリック教会を訪ねたとき、祭壇の様子などに驚いたことが思い出されるのです。

その後アライアンス教会もでき、時々若い桑原牧師が訪ねてこられました。

昭和 11 年 9 月に、丹原教会を 5 年計画で新居浜に移転させたいので面倒を見て欲しいとの依頼が、日本メソジスト教会よりありました。

教会は昭和 12 年 5 月 16 日に第一回目の礼拝がもたれ、昭和 17 年 11 月までの間に、牧師が 3 人代わり、礼拝出席者は 15・6 名でした。

私は、この間に受洗したのです。

当時の藤田牧師の媒酌・司式によって新会堂で結婚式の予定でしたが間に合わず、昭和 17 年 10 月 17 日に私の家で結婚式を挙げ上京しました。

この時、最後のお祈りをしてくれた母は、12 月に病に倒れ翌年 1 月に天に召されました。

上京した私は日本メソジストの牛込教会に出席していましたが、段々と戦争が激しくなってきた昭和 19 年の秋頃、長女を身籠っていた私は、妊娠婦を疎開させるという国の政策によって、田舎のない者は千葉の方に集団疎開させることになっていましたが、丁度、兄が東京に出張してきましたので、一緒に新居浜に連れて帰ってもらったのです。

昭和 20 年の空襲によって牛込教会は焼失しましたが、本当にすばらしい会堂で、坐っているだけで心が洗われるようでした。

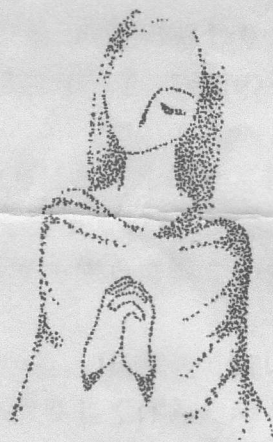
現在、私はここにありますが、信仰は教派や教会ではないと信じています。

佐伯 博子姉

1921 年(大正 10 年)6 月 25 日生れ

1937 年(昭和 12 年)8 月 3 日受洗

授洗者 白戸 良作牧師



執筆年：2005 年